



ともに成長して発展する場として — 京町家アートスペース「be 京都」 —

このコーナーでは、京都のまちづくりに取り組む企業・団体をご紹介します。今回は、築200年以上の京町家をアートスペースとして改装された「be京都（ビ・キヨウト）」です。2007年の開館以来、さまざまなイベントや活動の場として活用されています。ご主人と共にbe京都を運営されている、館長の岡元麻有さんにお話を伺いました。



岡元 麻有さん

be京都とはどんな場所ですか

文化・芸術・活動のコミュニティスペースとして、さまざまな人が集い、学び、表現する場です。作品展やイベント会場としてお使いいただけます。ギャラリーと、勉強会などに適した和室や板の間のレンタルスペースなどがあります。さまざまなアーティストや作家による展覧会の開催やそのサポートをはじめ、手作り市や自主企画による各種講座など、年間を通して多くのイベントの開催と運営のお手伝いをしています。



ギャラリースペース（左）と
レンタルスペース（右）。

京町家の改修にあたっては、
まちの「京町家まちづくりファンド」の改修助成も活用されました。

設立の経緯を教えて下さい

事業をはじめるにあたり、何かを人に伝える事、文化・芸術に関する事をやりたいと考えていたため、日本の美意識が集結している京都を選びました。主人が芸大生だった頃に作品の発表の場に苦労した経験から、多くの人が気軽に発表できるギャラリーを開くことにしたのですが、京都でやるからには京町家でやりたいと探していたところ、空き家になっていたこの京町家と出会いました。

be京都とは「美」と「be」の二つの意味を持ちます。be動詞が主語によってさまざまに変化するように、この場所を使う皆さんに応じて変化して寄り添い、それぞれが主人公となり個性を表現できる場所でありたいという思いから名付けました。

今後の活動の展望は？

当初からコンセプトは変わっていませんが、13年続けてきたことで定着してきたことを感じます。世界を舞台に活躍されている作家などさまざまな方に利用して頂き、より多くの人に集まって頂ける場となりました。作品を発表したいアーティストがbe京都に相談して来られるなど、発信のためのプロデュースも行っています。今後はより深くここに根ざして、そして世界に向けて文化・芸術・活動を伝えていく場となればと思います。

また、年中行事などの伝統文化を子どもたちに伝える活動もはじめていますが、生活に根ざした町家で行うからこそ意味があると思います。行事の意味を知り、子どもたちが自信を持って次代に伝えていけるようにしたいです。

京都や町に対する想いをお聞かせ下さい

この京町家に受け継がれてきた歴史は何物にも代えがたく、たまたま今はこの家を守らせてもらっていますが、この場所に多くの人が集う様子を見ると嬉しく思うとともに、大切にしなければと思う。しかしこの場所があるだけでは駄目で、もっと活気がありみんなが誇りを持てる町、誰かが何かをしているのを応援できる町、みんなが気持ち良く過ごせる町になると良いですね。そのためbe京都が役立つことを願っていますし、そんな町になればこの場所もますます輝けると思います。

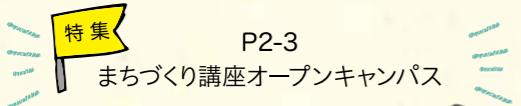
be京都ではさまざまなイベントや講座を開催中！

詳しくはbe京都ホームページ <https://www.be-kyoto.jp> をご覧ください

皆さまの御支援に
深く感謝申し上げます

- 個人（五十音順 敬称略）岡田良子、岡本秀巳、角川裕次、加味根徹也、河崎尚志、木崎勝夫、木股博一、桑原尚史、高木貴子、辻勇治、寺島彰、西村孝平、萩本暁、望月幸夫、山内比呂史、米谷朋恵、芳野名の非公開希望を合わせた18名の皆さま
- 法人・団体（五十音順 敬称略）（株）アベックス西日本、（株）井筒八幡橋本舗、（株）伊藤園、FVジャパン（株）、（株）大下工務店、京果 京都青果合同（株）、京町家・風の会、コカ・コーラボトラーズジャパン（株）、（株）さんけい、（株）松栄堂、（有）鈴木モータース、Deepest Kyoto Tour実行委員会、（株）ニシザワスティ、（公財）日新電機グループ社会貢献基金、（一財）長谷川・歴史・文化交流の家、（株）フージャースホールディングス、（株）藤権、（株）フラットエージェンシー、まいまい京都、（株）都ハウジング

京まち工房 87



P2-3

まちづくり講座オープンキャンパス



CONTENTS

- P1 京都人⑦の京都知らず P4 京町家相談会 P5 WMFの皆さま京都へ
- P6 地域まちづくり・専門家紹介／ようこそ！まちセンへ
- P7 私と京都／京都人⑦の京都知らず編集後記
- P8 企業（賛助団体）紹介／ファンド寄附者名簿

令和元年度賛助会員募集中！

入会をご希望の方はまちセンにお問合せいただくか、ホームページをご覧ください

賛助会員の皆さま

「京ぐる」ネットワーク 「地域おこし」をコーディネート 相談センター	「地域おこし」をコーディネート 相談センター	株式会社地域計画建築研究所	
京町家居住支援者会議	公益社団法人 京都市景観協会	ART GALLERY & RENTAL SPACE be-kyoto	株式会社 都ハウジング
99大阪ガス	一般社団法人 京都府不動産 コンサルティング協会	RITSUMEIKAN	
株式会社アーキスタイル	京都とまち まちづくり 京都信用金庫	SAPPORO	中藏
京都でんき	京都中央信用金庫	KES スタッフ1募集	

公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口
上る梅塀町83番地の1（河原町五条下る東側）
ひと・まち交流館 京都地下1階
TEL: 075-354-8701 FAX: 075-354-8704
E-mail: machi.info@hitomachi-kyoto.jp
HP: <http://kyoto-machisen.jp>

京都市景観・まちづくりセンター



京町家をお探しです。
株式会社 八清（ハチセ）



この印物物
不要になれば
譲りますとして
古紙回収へ。

公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンターは
環境負荷低減に努めています。

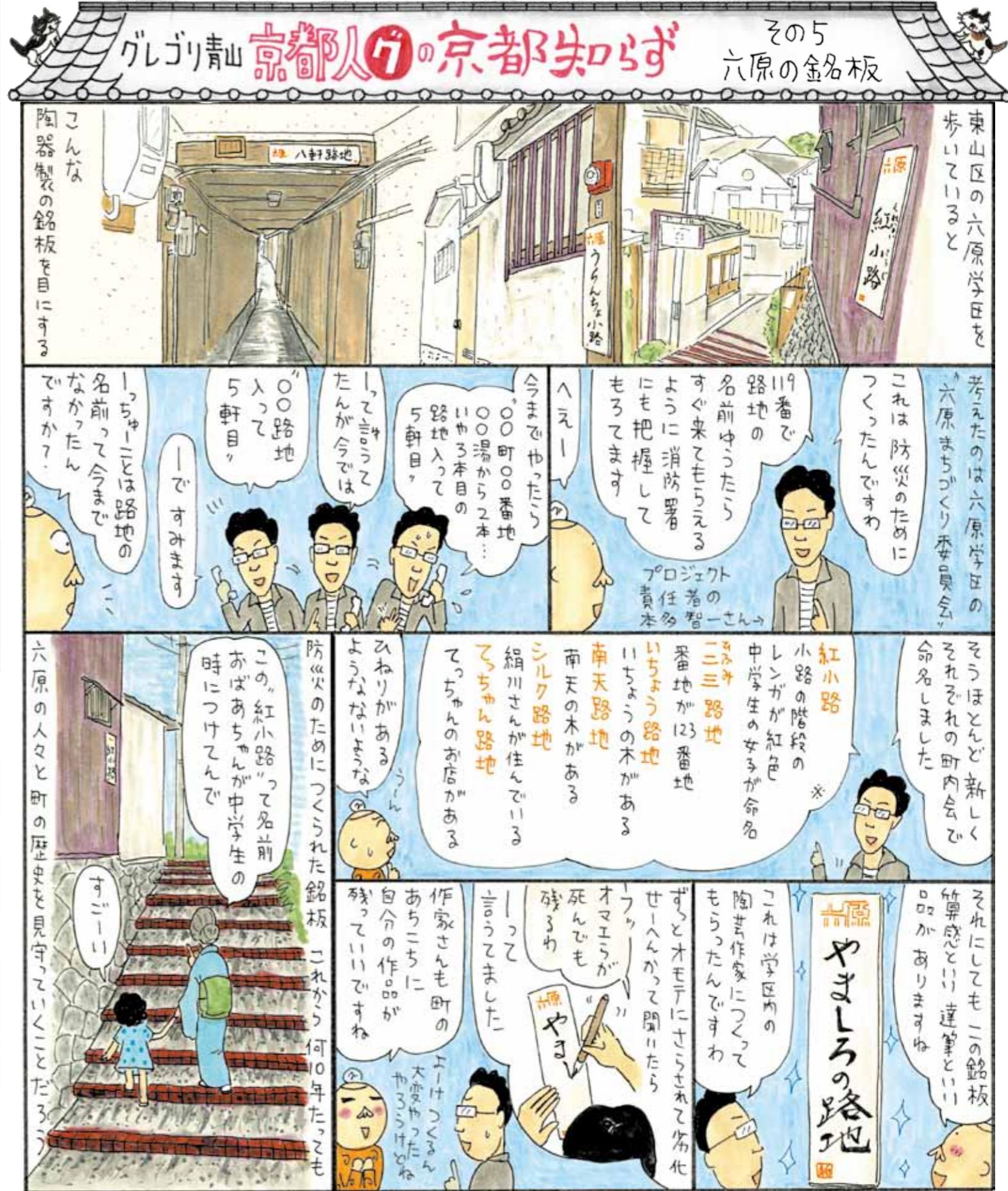
ニュースレター

京まち工房

公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター



87



4つのまちづくり講座が集合!

まちづくり講座 オープンキャンパス

平成31年3月3日(日)

共催:NPO法人京都景観フォーラム、認定NPO法人古材文化の会、京都市都市計画局まち再生・創造推進室

京都市景観・まちづくりセンター(以下「まちセン」)では、「景観・まちづくり大学」として主催している「京のまちづくり史連続講座」「京町家再生セミナー」や、NPOと連携して実施している「京都景観エリアマネジメント講座」「京都市文化財マネージャー育成講座」を通して、多様な視点から景観・まちづくりを考え、実践することができるまちづくりの担い手育成や情報発信に取り組んでいます。今回の催しでは、それら4講座が一堂に会し、それぞれの講座の内容や目的、雰囲気などをより深く知っていただくため、各講座のプレゼンテーションを行うとともに、特別講義などを実施し、景観・まちづくりの学びの始めの一歩となりました。

セミナープレゼンテーション

各講座の担当者から、各講座の目的や目指す方向、講座の面白さなどについて紹介しました。

京町家再生セミナー

京町家の所有者や居住者、具体的に京町家の居住や活用を検討している方向けのセミナーです。年間を通して、改修の手法、相続、資金調達、活用方法など、すぐに役立てられる京町家の保全・再生に関するさまざまな知識をわかりやすく学びます。



(京都市景観・まちづくりセンター 島垣透)

京都市文化財マネージャー育成講座

歴史的建造物の保存活用に興味のある方を対象に、建築士の資格の有無に関わらず受け入れています。古材文化の会と京都市、まちセンの三者で実行委員会を構成し、毎年1月から7月までの半年間、延べ66時間実施しています。



講座は6名1グループで、お互いが足りないところや苦手な分野を補いながら、座学だけでなく、実際の改修現場の見学や、歴史ある建物の所有者からの聞き取り調査、建物の実測や野帳^{*}をとるなどの演習も3回実施しており、大変充実した内容となっています。受講をきっかけに、身近な歴史ある建物などを発見し評価し、活用しながら次世代につなげる。悩んだり困っている所有者に寄り添いながら自分なりの活動を行い、少しでも社会貢献ができれば幸せだと考えています。^{*}野帳(やちょう):建物の構造のスケッチ

(認定NPO法人 古材文化の会 風月匠幹廣氏)

景観・まちづくり大学(夏季)

京のまちづくり史連続講座

●7/26(金) まちづくりの場としての元校舎
—明倫学区を事例に—

●8/ 9(金) 地蔵盆とまちづくり

時 間 どちらも19:00~

受講料 1,000円(学生500円)

京町家再生セミナー

●7/25(木) 京町家の保存と活用にむけての改修事例

●9/26(木) 京町家の税金について学ぶ

時 間 どちらも18:30~

受講料 500円

京都景観エリアマネジメント講座

●7/ 6(土) 第一回 基礎理論(1)
景観とは何か

●8/31(土) 第二回 基礎理論(2)
景観のマネジメント

時 間 どちらも13:30~

お問合せ・申込 京都景観フォーラム
kkf@kyotokeikan.org

特別講義

「土地の記憶、まちの履歴～プラタモリが通り過ぎた京都～」

講師:梅林秀行氏(京都高低差崖会 崖長)

本日は「プラタモリが通り過ぎた京都」、テレビでは放送されないまちの側面を紹介しながら、講座の果たすべき役割や、主催である「まちセン」の基本理念にある「京都らしさ」、「住民主体」について、皆さんと考えたいと思います。

プラタモリで御土居(北区鷹峯周辺)を取り上げることになり、下見に同行したプロデューサーが漏らした「はんなりじやない京都だね」。この「〇〇じゃない京都」という感想が非常に重要でした。

御土居周辺は、旧市街地の郊外ならではの、江戸時代の都市計画が現在もまちの骨格として生き、現在の町並みに表れている立派な都市景観、歴史的景観です。

歴史的な町並みというのは、建物が古ければ歴史的なのではなく、「地域の生活史が景観として外型化されたもの」です。

景観は現在も変化し続けています。古い建物が残る町並みを保全する目的は何

か。「京都らしさ」の名のもとにむしろ排除されているものはないか。

プラタモリが通り過ぎたまちからそういう現実の課題が表面化しました。

まちを歩くことは当然何かしらの当事者性を持ちえます。課題に触れないまちあるきは嘘になると思います。

まちづくりという現実課題にアプローチする活動であれば尚更、まちセンの事業やこれらの講座の受益者は誰か…何を、誰のために学ぶのか。

さまざまな形で表現される排除と、それと対抗しながら包摂の運動が現在の町並みとして姿を現している、そこにどう関わっていくか、それこそが「プラタモリが通り過ぎた京都」というテーマの核心です。

まちづくりの最前線は今、現在の私たちがいる場所です。自分自身が当事者として関わっていく。これほどやりがいのある活動もありません。



まちづくりというのは、異なる利害や問題に対してさまざまな立場から話し合うこと、即ち公共圏の形成そのものでしょう。

利害が違うまで終わるのではなく話し合うこと。ただ、話し合いをする際には当然、補助線が必要です。その手がかりがこういった講座から得られるべきだと思います。

景観やまちを解釈するための予備知識として「学びが必要」なのです。

プラタモリのまちあるきを通して直面した現代のまちづくりの課題に対し、講座がどのようにアプローチしなければならないのか、景観・まちづくりを学ぶ意義の問題提起もされました。

梅林氏

- 現実の課題に対しての働きかけとして、講座にどんな内容を込めたり、どんな変化がありましたか?
- 京都らしくないまちになりつつある現在、まちセンであったり、エリマネであったり、さまざまな講座が果たす役割はますます重くなっていると思います。
- 政策や具体案も既にあるのに届いていない場合、事業そのものが打って出る、その方に近づいていく活動をアウトチーナーと言います。
- 具体的なスキームであったり、事例は蓄積されているだけれども、それをどう住民に降ろしていくのか、届けるのか。そこがもしかしたらコーディネーターやエリアマネージャー、文化財マネージャーのお仕事なのだと思います。

森川氏

(京都景観フォーラム)

- 講座開始から10年経ち、企画の見直しに去年から取り組んでいます。
- まちづくりは流動的なので、同じスキームのまま続けると古くなる、だから先手を打たないと。今回の企画もその思いでまちセンと意見交換する場から生まれました。
- 講座同士が連携し、京都のまちづくりに関わっていこうとしてくれる人が講座を上手く組み合わせながら、スキルアップしてもらえる道筋をつくりたいと思います。
- まちに关心のある人が、自分の職能などを活かしながら、色んな角度からまちづくりにフィードバックする、それを私たちのような団体がマネジメントしていかなければならぬと思っています。



島垣

- 実際は町家に住んでいても、ご自身のお宅を町家と認識されていない方も多く見受けられます。
- 町家が何で京都にとって大切なのか、そういうところも講座を通して皆さんに紹介していきたいと思います。

風月氏

- 歴史ある建物の所有者の方などから色々な相談を受けたものを、行政の文化財保護担当の方に伝えて、やがてその建物が文化財の登録につながるということはあります。
- 講座は毎年ブラッシュアップしています。しかし、こういう活動をしている団体があるということを知らない方が多いのが課題でもあるので、講座を受けられた後の活動をサポートすることも大切だと考えています。

池谷

- 講座が直接、課題の解決につながるものではありませんが、まちの歴史的な文脈から、まちづくりのヒントになる講座を目指しています。
- まちづくりの取組が動き出し、地域の将来像を地元の人と一緒に考える時も、地域の歴史や特性が基礎になることが多いと思います。コーディネーターの役割として、実際の取組につなげていきたいと思います。

「京町家相談会」を開催しました



京町家や空き家を所有、またはお住まいの皆さまが、京町家相談員をはじめとした各分野の京町家の専門家に気軽に相談する機会として「京町家相談会」を開催いたしました。平成29年の「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」(京町家条例)が制定から1年あまり経ち、京町家の保全・継承はますます重要な課題になっています。所有者や居住者の皆さまの保全・継承に関する相談などに京町家等継承ネットがお答えしました。

開催概要

開催日	平成31年3月9日(土)	主催	京町家等継承ネット、 公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター
会場	くろちく天正館二階「天正の間」 (中京区新町通錦小路上ル百足屋町380)	後援	京都市
開催時間	一般相談 13:00~16:30 専門相談(事前予約制 各回3組) ①13:00~14:00 ②14:15~15:15 ③15:30~16:30	協力	株式会社くろちく 相談件数 専門相談8件、一般相談13件

平成30年の夏は、地震と台風によって、京町家等の古い建物の瓦や外観などが大きな被害を受けました。

建物にとって特に重要な屋根が傷み、建物内に水が入ってしまうと、老朽化が急速に進むため、建物の今後について早急に考えなくてはならない事態になってしまいます。

また、京町家等の古い建物を保全するための活用に際して、建物を賃貸に出し、誰かに使ってもらうまでには、決めなければならないことや、考えなくてはならないことがたくさんあり、すぐ行動に移せるものではありません。相続が発生する前の準備として、家族で話し合い、同意を得ることも大切です。

古い建物を所有する方、居住する方がお一人で解決することが難しい問題に、多彩な専門分野の知識を持った相談員に、無料で相談できる機会がこの相談会です。相談内容に応じて、専門家(住宅士、大工、建築士、税理士、不動産鑑定士、弁護士、行政書士、金融機関等)に相談テーブルにお着きいただき、専門的な視点から助言や情報提供を行っていただきました。相談会終了後も引き続き経過を伺いながら、必要に応じて相談員が現地を訪れる「専門相談」を実施するなど、きめ細やかな対応を行っています。

京都市では、京町家条例の制定に伴い、京町家等の保全・継承を支援するためのメニューが強化されています。各種助成の目的や対象が異なるために、支援メニューの全容を把握するのは簡単なことではありません。相談会では、どのメニューを使うことができ、そのためには何をしなくてはならないのかをご説明しました。

周囲からは「潰すしかない」と言われているけれども、京町家を京町家として継承したい、相談費用や営業電話の心配なく話を聞いてほしい、空き家になった京町家を誰かに使ってほしい…などの不安や疑問をお持ちの方々に気軽にお越しいただけるよう、今後も相談窓口を開き続けたいと思っています。

専門相談員一覧(順不同、敬称略)

大前温彦、中積一、西村孝平、吉田光一、小川雅敬、小野敏明、田原利晃、末川協、杉本考次、伏木道雄、松木一恭、前岡照紀、宮田真悟、玉村匡、小西康雄、綾野晃、新井宏弥、水谷英一、山下明宏、重野利明、渡辺一義
京都市都市計画局まち再生・創造推進室 若松夏加



ワールド・モニュメント財団日本ツアー



京町家を訪ねて



令和元年5月13日、ニューヨークに本部を置くワールド・モニュメント財団(World Monuments Fund, WMF)のローナ・グッドマン(Ms. Lorna Goodman)会長をはじめ、役員や寄付者の皆さまが、京町家再生プロジェクトとして支援をした釜座町町家、四条町大船鉢会所などを訪問されました。修復・改修された京町家をご覧いた

だき、プロジェクト関係者から、地域コミュニティの絆や伝統技術が継承されることに貢献している成果をご報告しました。京町家への支援や長きに渡る親交に、WMFへ改めて感謝の意をお伝えしました。WMF日本ツアーアとして、支援先の京都の宝鏡寺・靈鑑寺、奈良の中宮寺、愛媛の少彦名神社などを巡られました。

訪問1



釜座町町家

京町家再生研究会副理事長で当財団理事の宗田好史教授(京都府立大学)から、釜座町町家の修復事業の解説をいただきました。WMFのダーリン・マクロード(Ms. Darlene McClaud)上席事業顧問は、京町家の再生を支援することは景観保全、伝統技術の伝承への寄与に加えて、京町家の暮らしに息づいている茶道・華道をはじめとした伝統文化を守ることにもつながると理解を示されました。

訪問4

四条町大船鉢会所

(公財)四条町大船鉢保存会の林邦彦理事長や当財団の青山吉隆理事長をはじめとする関係者と懇談後、設計を担当した建築士の末川協氏より、改修事業の説明をいただきました。祇園祭の様子を動画で紹介し、鉢の部材を保管する収蔵庫や貴重な懸装品も披露されました。



訪問2

大西清右衛門美術館(釜座町)の視察

訪問3

京町家再生研究会本部(小島家)にて茶道体験

Award Ceremony

ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞 最優秀賞の受賞盾の授与

2018年ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞最優秀賞の受賞を記念し、受賞盾がユネスコより贈られました。日本ユネスコ国内委員会(文部科学省)事務局の代理で、プレゼンターとして文化庁地域文化創生本部より石飛英人上席調査役にお越しいただきました。WMFの皆さまにも受賞を報告し、共にお祝いしました。

左から青山氏、林氏、稻垣光彦氏(WMF日本代表)、石飛氏



訪問5

WMF主催の懇談会

(会場:ザ ソウドウ 東山 京都、ザ・アトリエ)

門川大作京都市長にもご参加いただき、WMFと京都の関係者が和やかに親睦を深めました。





第14回 地域まちづくり・京町家の専門家紹介

踏み出すことが、複雑さを解く一歩に

当財団は多くの専門家の方々のご協力のもと、地域のまちづくりや京町家の保全・再生にかかる事業を行っています。このコーナーでは、京都のまちにかかる専門家の方々をご紹介しています。今回は、地域のまちづくりを専門家として支援する研究者をご紹介します。

前田 昌弘氏 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 講師

専門：建築計画・住居・まちづくり。博士（工学）。1980年奈良県生まれ。京都大学卒業・修了後・同助教を経て、2017年より現職。2004年インド洋津波被災地の住まい復興のフィールドワークで研究を開始し、その後、国内の災害復興・地域まちづくりから、海外のNGO・大学との協働による災害復興・地域再生支援まで幅広く研究・実践活動を展開。著書に『津波被災と再定住－コミュニティのレジリエンスを支える』（単著、2016年）、『建築フィールドワークの系譜－先駆的研究室の方法論を探る』（共著、2018年）など。

地域まちづくりにかかるきっかけ

地域まちづくりにかかるきっかけは、スリランカのインド洋大津波（2004年）の住まい復興の調査で、住民が能動的に住まいや仕事を生み出す様子を目撃したことです。行政力が弱い途上国では自助の意識が高いですが、生存のための逞しさ、適応力、コミュニティの復元力などは、一定以上の期間、現場で観察してはじめて見えてきました。

東日本大震災の際は、仮設住宅の住環境を住民自ら改善するための、メニューと材料を提供する活動を行いました。日本で災害復興とまちづくりにかかるきっかけとなりました。

有隣学区とのかかわり

その頃、有隣学区でお地蔵さんの調査を手伝いながら、コミュニティにおける地蔵盆の役割を研究しました。評価の視点に「レジリエンス（回復力）」という概念を用い、地蔵盆が時代に合わせてあり方を変えつつ、コミュニティの核になっているという視点で研究しました。有隣学区とは、現在も防災まちづくりなどでかかわりが続いている。



京都の高い自治意識

京都には、先進国でありながら、行政に頼らず住民がまちづくりを行う意識が根付いています。この自治意識と歴史を背景に、人々がコミュニティを通じて集合的にまちに働きかけることが、まちの個性につながっています。

住民と元学区とのかかわり方は世代ごとに異なりますが、その歴史的な蓄積は、地域自治に限らずさまざまな取組の受け皿として、これからも柔軟に活かすことができると思います。

ミクロの視点でアクションを起こす

日本全体の変化が地域に与える影響は予測ができません。マクロな視点を持つつ、ミクロの視点で地域に入り、アクションを起こすことではじめて地域を理解できるというものが、基本的な研究のスタンスです。アクションによって、反対意見を含めたさまざまな意見が得られ、地域の空間的なポテンシャルや人間関係が見えてくるなど、地域を理解でき、良い変化につながります。自ら踏み出さない限り、複雑なことは解けないと思います。



視察でまちセン*を訪れた方をご紹介する「ようこそ！まちセンへ」。今回は金沢市立浅野川中学校の3年生の皆さまです。浅野川中学校はJR金沢駅の北側、浅野川沿いにあります。4月に修学旅行で京都にいらっしゃった時、京都市景観・まちづくりセンターをご見学されました。



金沢市には、金沢城、武家屋敷跡、茶屋街など、昔の城下町の面影を感じる建物が数多く残っています。生徒の皆さまは金沢のまちについて学ぶなかで、古都・京都と比べてみようと、当センターにお越しになりました。

午前の講義では、皆さまから事前に寄せられたご質問をもとに、事業第二課の野間課長が京都のまちなみと京町家について話しました。山、川、古い寺社、京町家が京都の景観を形づくっていること、京町家の特徴、景観を守る取組の内容などで、皆さま、真剣に耳を傾けていらっしゃいました。

講義の後、皆さまは地域まちづくり情報コーナーのミニチュアハウスや、展示施設「京のまちかど」を見学し、写真を撮って楽しんでおられました。「京町家がとても計算してつくられているのに驚きました。素敵です」とおっしゃっていました。

*まちセン=公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター

私と京都

「京都人」としての誇りを世界へ

1961年、山科で生を受け、10歳で宇治に越した私にとって、当時は「京都」というのは、京都駅であり、三条京阪であり四条河原町だった。

ベストセラーになった「京都〇〇」の著者のような、言うところの「京都」に対しコンプレックスを抱くほどのセンスもなく成長してきた私だが、小さいときから歴史は好きで、愛読書は「漫画日本の歴史」という文学？少年であり、その後、司馬遼をはじめとする歴史小説へと進んでいくことになったが、当然、小説では多く「京都」が登場し、手の届く範囲にある地名やお寺などが出てくると、自分なりに百科事典などで由緒などを調べ、満足していたのは、京都人として誇りが自分の中で芽生えていたからかも知れない。また、そのことで、私の中の「京都」も少しづつ範囲は広がっていった。

長じて京都市役所に入庁し、2004年、はじめて課長となり、与えられた仕事が「京都創生」であり、「2008年サミットの誘致」であった。

それまで配属されてきたのは、どちらといえば管理部門が多く、「京都であるからこそ」といった仕事には就いておらず、子ども心に芽生えだした京都人としての誇りは絶余曲折を経てすでに埃まみれの状態であった。まさに「すわ！ 鎌倉へ」ならぬ「すわ！ 京都へ」（と思ったような記憶が…）。

すこし脱線するが、改めて京都創生の提言を読み直してみた。

2003年、故梅原猛先生を座長とする京都創生懇談会から「国家

戦略として京都創生」の提言をいただいた。そのなかで、京都の景観を保全・再生・創造するために歴史都市再生法を制定すべし、京都に蓄積する文化財を十分に保護・活用すべし、大交流時代における国策として観光立国を目指すために京都を戦略拠点とすべしといった提案がなされていた。18年経ち、急激に伸びているインバウンドを前に、何をか言わんや。

さて、ほんまほんの京都を知らねば、という恐怖感にも似た決意を胸に、それから十余年。

今では、急速に浸透したインターネットにより、知識はもとより、SNSによる臨場感のある情報も容易に手に入る状況になったが、自分の汗でどれくらい血となり肉となったのかは、伏せさせていただく。ただ、最近、趣味の一つとなったツーリングにおいて、訪ねた土地の街並みの見学は欠かせないものになっているのは、常に「京都」を意識している所為なのだと思う。

さて、「持続可能な開発目標（SDGs）」の観点から、経済紙が調査を行い、74の指標を基に調査を行った結果、815の市区のなかでトップとなった。小さいころに「京の都」、「旧5大都市」といったことでの誇りは、市民の方々と進めてきた取組によって、真の誇りになったと感じている。

京都人⑦の京都知らず 編集後記

六原学区は、京都市やまちセンと連携しながら、平成24年度から防災まちづくりに取り組んでいます。銘板の他にも、路地の名前を載せた「あんしんあんぜんマップ」「防災ろじすごろく」の作成など、色々とユニークな取組をされています。

六原の路地を訪ねた時、子どもの頃に自分が住んでいた路地を思い出しました。大きな車が通らない、静かで落ち着く空間。掃き清められた道や、家の前にある鉢植えの花からは、住んでいる人達の丁寧な暮らしどりが伝わってきました。

路地銘板は、菊浜、正親など、六原以外の学区

にもあります。六原の銘板は陶器製、正親は銘板の下に西陣織をあしらうなど、学区によって特徴があるのも興味深いことです。地域コミュニティの衰退が問題になっていますが、路地銘板は災害時の備えだけでなく、まちに愛着を持つことにも大いに役立っています。（田中）



古い日本映画、特に京都が舞台の映画を見るのが好きです。昔の京都のまちなみが映ると、あ、これあの通りのあそこや、めっちゃ京町家残ってる、などと発見する楽しさがあります。あと、当時の女優さんの美しい着物姿を見るのも楽しめます。



著者：グレゴリ青山

漫画家、イラストレーター。1966年、京都市生まれ。壬生の地で生まれ育つ。現在は京都府亀岡市在住。京都人による京都発見本『深ぼり京都さんば』（集英社インターナショナル）、京都が舞台の少女漫画『薄幸日和』（小学館）、京都のガイドブック『ねうちもん京都』（KADOKAWA）など、京都関連の著書多数。